

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年11月9日

氏名 (フリガナ)	大村真葵子(オオムラマキコ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2017年10月8日(日)～10月14日(土)
所属機関名 身分	総合病院 聖隷浜松病院 助産師

私が海外研修に応募した動機は、1つ目として、マグネットとJC認定病院の看護の良いところを学ぶ、2つ目にアメリカと日本における看護の違いを知り、良い所を取り入れるであった。

1つ目については、今回見学したオレゴン州ポートランドのプロヴィデンス・セント・ヴィンセントメディカルセンター病院は、JC認定病院であり、過去4回のマグネット認可を受け、5度目の認可取得に向けて準備をしていた。過去の認定取得を大変名誉な事として、認定証を病院内に掲示し、マグネット認定に貢献したスタッフの名前が刻まれたプレートも同様に掲示していた。施設環境がとても綺麗に整備され、病棟や外来の受付や壁、売店などにハウスの飾り付けが賑やかに施され、来院者が季節感を感じられるように工夫されていた。スタッフ紹介の写真や指標に対する取り組みの進捗が分かるポスターが、利用者の目に入るところに掲示されている事から、自分たちの実践している事に自信をもって、他部署や利用して下さる方にどんどん発信していこうという精神を感じた。また、見学の際に接してくれた様々な職種のスタッフが皆温かく接してくれて、病院を訪れる人への一貫したホスピタリティの高さを感じた。マグネット認証取得のためには、データや制度の準備など、やるべき課題が数多くある。しかし認証取得が最終目的でなく、そこにいたるまでの実践過程が大切なのであって、認証を受けることは結果だということを、そこで働く人々をみて実感した。現在当院はJCIの再認証を受ける為の準備をしているが、病院全体のスタッフ全体が、認証取得の目的や意図を理解して活動に取り組んでもらうように働きかけるのは、とても大変である。しかしその取り組みが医療者の働く環境の改善やモチベーションのアップに繋がり、スタッフがいきいきと働けるようになることが、患者満足度につながる。JCIの認証を受けた病院であるということが対外的にも告知できれば、そこで働きたいと思う人が集まり、更に優れた人材が集まる魅力ある病院作りにも繋がるというプラスの連鎖が生まれることを改めて実感した。当院でも看護が実践している活動として『看護語ろう会』の開催や、職場の頑張っている人や取り組みを紹介する『きらきら聖人』が定期的に刊行され、院内に掲示されている。また看護指標の結果をホームページに載せたり、各病棟の廊下に掲示している。職場の中にいると他の職場に行かない限り様子が分からない為、これらの取り組みは他病棟の良い看護を知る機会にもなるし、自職場の事を知って貰える機会にもなる。看護は見えない物だからこそ、声に出して発表する場が必要であり、結果を目に見える形で発信していくことが必要なのだと、改めて思った。

2つめについては、保険制度の違いが患者さんへの対応に大きな違いを生んでいた。アメリカでの代表的な死因は、心疾患や悪性腫瘍・脳血管疾患である。平均寿命も延びており糖尿病等の慢性疾患の増加が問題視されている。アメリカではヘルスマアにより、これまでは経済力が無い為に医療を受けられなかった人を救済する措置が取られるようになったけれど、医療費が高いことから在院日数は日本に比べて非常に短いため、入院当初からソーシャルワーカーと連携を取って、入院費用についての相談や、退院後のフォローアップに力を入れていることが分かった。それでも入院費用の軽減のため、手術翌日に退院することもある。その際には看護師が在宅患者からかかってくる電話で病状を確認したり、自宅で抗癌剤を使用している患者さんであれば、効果や副作用について電話で状況を聞き、医師と相談しながら判断し、患者が自宅で対処できるように指示を伝え、対応している。

しかし言葉の壁もあり電話では意思疎通が困難な事もあるとの事であった。在院日数の長い日本とは違う問題があると感じた。

私が勤務している MFICU の「患者さんと家族が少しでも安全に・安心して赤ちゃんを迎える為に助産業務の範囲内で身体心理社会的に行っている支援」は、アメリカの看護と同じか、それ以上にやれている部分があると感じたので、もっと自信を持ち、その 1 つ 1 つをより高めていきたい、医師と対等とまではいなくても、看護の部分ではより一層患者さんに寄り添った支援を行っていききたいと思った。また、早産になりそうな時は、日本と同様に NICU と連携を取り、ソーシャルワーカーが分娩前に家族に NICU を案内している事を聞いた。日本でもハイリスク妊産婦が増えており、入院中からの要支援ケース、退院後の地域保健師に早期介入を依頼する必要のあるケースが増えている。退院支援看護師養成研修での学びも活かして医療相談室や退院支援専従看護師、保健師などの多職種と共同したり、産科病棟や産科外来・NICU などの他病棟と連携して早期介入・継続支援をしていきたいと思った。

アメリカでは看護師が高い専門性を持ち、日本の看護師では行えない医療行為もある程度行える。医師と対等にデータを読み、病状や治療方針についてのカンファレンスに参加するそうである。アメリカの看護教育についても学ぶ機会あったが、学生のうちからシミュレーションラボの高性能なシミュレーターを使用して状況対応訓練を積んだり、実習で実際に患者さんを受け持って看護展開をする訓練をしてから現場に入ること、新人の内からより即戦力の高い看護師として期待される。自己研鑽のための研修費用に関しては病院が負担することが多く、1人の新人看護師を育てるために1千万かかるといわれている。日米で新人看護師教育は共通する部分があり、参考にすべき部分もあると感じた。

今回の研修旅行が私には初めての渡米だったが、トラベルパートナーズや日米医学医療交流財団の担当者の方が準備の段階からきめ細やかに対応して下さり、病院担当者の方の多大な支援もあって不安や緊張も少なく出発することができた。研修中もコーディネーターのジェフさんや通訳のジュンコさんを始めとして多くのスタッフが常にサポートして下さったお陰で、英語がほとんど話せない私も教授や病院スタッフに自分の聞きたい質問をどんどん発言し答えを頂く事が出来た。

これまでは自職場である MFICU で、助産師として働く事にやりがいを感じていたものの日々の業務や委員会活動の忙しさによって、疲弊してしまいモチベーションを保つのが難しい事があった。現地で働く日本人看護師の話聞き、働いている姿を目にし、言葉や生活習慣の違う国で働く大変さを乗り越えて生き生きと楽しそうに働いている様子に多に刺激を受けた。また、同じ研修に参加した様々な年代の看護師や助産師の方と交流し、海外で働くことを視野に入れて将来のビジョンを描いている人の話を聞いたりする事で、改めて自分の今後のキャリアプランについて考え直すきっかけになった。参加した研修生それぞれの病院の、各職場での問題や中堅層の抱えている悩みは皆同じと分かって連帯感が生まれ、どの職場でもみんな課題を抱えながらも何とかしようと頑張っている姿に、自分も頑張ろうと思えた。私はすぐに自己否定をし、自己開示をすることが苦手な傾向がある。自己開示して相手の懐に飛び込んで、周りに対するアンテナを高くして、自分の世界を広げることが課題である。今回、初めて会った研修生の方と海外研修という同じ目的をもって1週間共に過ごし、自己開示出来た事は自分の中で大きな成長であり、一歩も二歩も前に進めたと自己評価することができた。

慣れ親しんだ病棟に戻り中堅スタッフとして、他の病棟スタッフと一緒に、更にさまざまな事を自分から発信し病棟をより良くしていけるように、気持ちを新たに頑張りたいと思った。